文学の杜

仙台文学館友の会会報

第67号
令和3年11月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

「佐伯一麦　北根ダイアローグ2021」

漫画家いがらしみきお氏と話す

『ぼのぼの』の優しさと癒しをめぐって

佐伯館長が各分野で活躍する方を迎えてお話を伺うシリーズの第2回が開催された。いがらしみきお氏は加美町中新田出身で仙台市在住である。

この日も館長は『ぼのぼのたちの杜』を連想させる台原森林公園を歩いて来た。いがらし氏の日常はどうかと問うと「コロナ禍でリモートで仕事をしていた。変わらないのは定点観測のように同じコース、時間、距離を20数年来散歩している。マスクの日常を1年は書ける」と言って笑わせた。青いラッコの男の子にだけしかついていない名前の「ぼのぼの」を語る目が優しい。周りのキャラクターには名前を付けないでしまったが、今後もキャラクターをデフォルメすることなくじわーっとくる作品を目指したいし、絶筆は『ぼのぼの』でと語った。熱い思いが伝わってくるようであった。

スナドリネコさんの、人間にはない肉球についての話は印象深かった。漫画ではだれも描いていないということを受けて、館長は梶井基次郎の小説『愛撫』をあげた。主人公の瞼を肉球でなでる場面があるという。この本にも興味がそそられる。

「傑作と思う作品は」との問いには「それは読者が決めるのであってあげられない。ただ『でぶぼの』などのスピンオフ作品が自慢です」と語った。

『ぼのぼの』を書き始めてから35年、46巻が多くの人に今尚愛され続けている。その理由がよくわかるほのぼのダイアローグだった。

2021年9月20日開催　（一）

第62回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・大和恵信さん（石巻市）
晩翠あおば賞・佐藤雛さん（岩沼市）

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第62回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月17日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、石巻市立雄勝小学校2年大和恵信さんの「りょうしの子ども」。晩翠あおば賞は、岩沼市立岩沼中学校3年佐藤雛さんの「十五年」に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数651編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県亘理町・竹澤花さん、宮城県登米市・佐藤奏汰さん、登米市・矢部心美さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・宮路貴全さん、青森県八戸市・工藤小陽さん。

文友一滴

今年の中秋の名月は残念だった。駐車場の隅からススキをいただいてきて、窓辺に飾った。例年、月が中天にかかる頃まではカーテンを開けたままにしている。今年は閉じたカーテンの端を持ち上げて、時々月を探した。厚い雲に隠れて、気配さえ感じさせてくれなかった。十月の十三夜は絵に描いたような「月に叢雲」だった。雲間からの月光は冴え冴えとして、恐ろしいほどであった。そして十五夜の月は、晴れた空を平然と渡っていった。

月の満ち欠けや動きは物理現象で、そこに人間が立ち入ることはできない。しかし人間は月に感情移入し、満月の黒く見えるところを、兎や蟹、ヒキガエルなどに見立てた。現代の私たちは、それが月の海であることを知っている。でも、月から石を採取する時代になっても「お月様に兎がいるよ」などと子供に話しかける。

歌舞伎の名台詞にも月が登場する。お嬢吉三の「月も朧に白魚の」という名台詞は、NHKの「にほんごであそぼ」で子供たちが歌っている。「晦日に月の出る廓も　闇があるから憶えていろ」という御所五郎の台詞を聞いた観客は、すぐに「暗い夜道には気を付けろ」という脅し文句だと気付いた。満月は読書ができるほどの明るさだが、晦日は月の光がない闇夜、それを肌身で知っていた。そういえばジュリエットは「月にかけて誓うのはやめて」とロミオに言う。新月から満月へと姿を変える月、シェークスピアの時代の観客もすぐにピンときたのだろう。

今年は月を見上げる人が増えたようだ。ハーベストムーン、ハンタームーンという言葉をずいぶん見聞きした。月を見上げて、フッと湧き出た疑問をパッとネット検索、そういう人が大勢いたようだ。そんなゆとりの時間は、コロナからの贈り物だったのかもしれない。（和）

私と郷土と文学 ㉖

戦時下に書かれた太宰治の『津軽』。イギリス人アラン・ブースは太宰の辿った道を追体験、その記は『津軽』（新潮社）と題し刊行されている。また田澤拓也は最新刊『1976に東京で』（河出書房新社）の中で『津軽』を読み、太宰作品に傾倒したと書いている。津軽出身の私は、それほど作品を読んではいないが、『津軽』は強く印象に残っており、「この一作さえあれば彼は不朽の作家の一人だと云えるであろう」と詩人佐藤春夫の賛辞にうなずくひとりだ。

夏の津軽平野を走り抜ける津軽鉄道。車中に『津軽』の朗読が流れるという。心地よい響きが車窓に映る景色と溶け合う……旅情を誘う。半世紀も前の話になるが、『津軽』片手に、ゆかりの地を訪ねていた人がいた。一冊の本の中に郷愁を感じる言葉が息づいている、そんな感覚になる。

今年7月、北海道・北東北縄文遺跡群が世界文化遺産に登録された。遺跡は17ヶ所から成り、うち8ヶ所が青森県に在り、その大半が津軽地方に集中している。中でも半島の東側に位置する外ヶ浜町（旧蟹田町）の大平山元遺跡は、約1万5千年前のもので遺跡群の中では、もっとも古いと言われている。

『津軽』には「この外ヶ浜一帯は、津軽地方に於いて、最も古い歴史の存するところである」と書かれている。最も古い歴史とは有史以降のことを指しているが、外ヶ浜には有史以前の、最も古い縄文人の生活跡、つまり日本人のルーツを探る手がかりが埋もれているのだ。太宰がこのことを知ったら、どのようにつづるのだろう……想像をくすぐられる。

（其田敏美）

『津軽』雑感

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✽イギリスの作家、グレアム・スウィフトの小説『最後の注文』を読んだ。遺灰を海にと言って死んだジャックの頼みを実行すべく、4人の男たちは車で、指定された海に向かう。目的地までの間にそれぞれが語る短かい章で、彼等の関わりや秘密などが明かされて行く。意外な組み立て方である。優しく、温かく、そして厳かな作品である。（のん子）

✽2021年の日本伝統工芸展入選作品と、その制作過程を紹介した映像を見た。ガラス、染色、陶芸、金工、木竹工、漆芸、人形などの工芸品は、古くからある作り方に現代的工夫を加えて作られた見事なものばかり。

完成までの長い時間の経過、試行錯誤、緻密な作業を続けた名工達の素顔が、謙虚で穏やかなのが作品と共に強く心に残った。（N・S）

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

風と歩こう ⑯

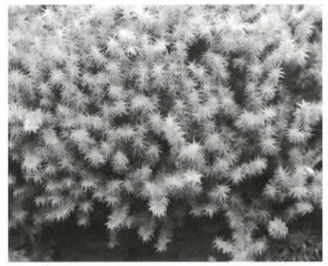

Photo by Ryuji Sasaki

雨上がりの午後、文学館の池側のドアから外に出た。まだ曇り空のままで人気はなく、ひんやりした空気が秋の深まりを感じさせた。池を覗くと、十余匹の鯉がくっついたり離れたり、ゆったりと泳いでいた。黒っぽい灰色の鯉が多いが、そこに混じってオレンジや白、赤や青のまだら模様など様々な色合いの鯉がいる。錦の鯉とはよく名付けたものだと納得した眺めだった。

濡れた歩道沿いに、明るい緑色が広がっているのが目に留まった。よく見ると、舗装された道を縁取るように苔がはびこっていた。こんもりと厚い部分もある。苔は藻や菌類にも属する独特な植物とか。以前、京都の苔寺の苔が異常気象で枯れかかっていると、茶色く黄ばんだ苔の映像とともにテレビで報道されたことを思い出した。その後あの苔寺の苔はどうなっているだろうかと思いながら、水辺の苔の健康な緑色を見ていて、なんだか嬉しい気持ちになっていた。（近）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第67号をお届けします。

▽緊急事態宣言が解除された10月、深呼吸しに野草園に出かけた。入口すぐに巨大な化石が置かれており解説板には「桜ケ丘団地造成の際に掘り起こされた。重さ5tのメタセコイアの化石」とあった。友は桜ケ丘の家の周りが太古の森に見えてきたと呟いた。（一）

▽十月からの小麦粉やマーガリン等の値上がりを機に、洋食から和食にしてはとの提案がラジオから聞こえてきて、興味深く聞いた。献立が割に手軽だということもあるが、米の内需拡大を図り生産量を増やし自給率を上げるのも狙いとか。成程と思いながら、頭の中に国防という言葉が浮かんだ。（近）

▽読書の秋、スポーツの秋、この「～の秋」という表現は、日本的なものらしい。例えば英語だと「秋は～～のベストシーズン」のようになる。少し理屈っぽく感じる。そして食欲の秋はあるのに他の季節はない。四季それぞれに美味しいものがある。なぜ秋だけ特別なのか。考えていたら、収穫という言葉に行き当たった。（和）

▽季節は知らぬ間に変わっていて、ある時「あ」と気付かされる。紅葉のニュースに、そんなに秋が深まっているのかと驚き、街路樹の銀杏の落ち葉に、冬がすぐそばに来ているのだと知る。年々鈍くなっている季節の感じ方、風の音に秋を感じ取った古人の繊細さを思う。もう山には積雪のたよりです。（佐）

特集「今年の夏こんなふうに過ごしました」

特集「今年の夏こんなふうに過ごしました」原稿募集に、多くの会員の皆さまから お寄せいただき、ありがとうございました。

◆こんにちは。いつも楽しい情報を頂き有難うございます。コロナの流行は、なかなか収束せず、色々迷った末に、ワクチン2回接種しました。心配していた副反応は殆どありませんでした。それでもまだ電車に乗って出掛けたりは出来ていません。この先、秋・冬をのりこえて、又自由に人と会う事が出来る日が待ち遠しいです。こういう時だからこそ体験できる事を、大切にしていこうと思います。

（松本ミエ）

◆飛び交う言葉がいつになくヒリヒリと感じられるこの夏。配慮のない言葉、批判、あまり届かない釈明。多くの評論。様々な見方があるのは当然、自由に意見を言えるのは良いことと思いつつ、疲れてしまいテレビを消す。読みかけの長編小説を一旦閉じて、須賀敦子の『コルシア書店の仲間たち』を再読してみる。同書も政治的論争の時代が背景だが、詩があり、詩人がいることに救われる。

（加藤博道）

◆今夏一番の暑い日、お隣りさんから林檎を戴いた。庭の木に初めて生った小さい実。陽に当った真赤な皮を剥くと身は白く柔らかい。口に含むと仄かに爽やかな味。とっさに「アダムとエバが食べた林檎の味はこれだ」と思ってしまった。初々しい素朴な味が遥か昔のエデンの園に一時私を誘ってくれた。楽園では涼風が心地よい。因みに私の住む中山団地に蛇はいない。こわい神様もいない。

（多田緑）

◆奥羽本線の米沢福島間は私の好きな路線の一つである。お目当ては峠駅で売っている「ちから～もち」。今年の夏も千円札を握りしめ、ドアの前でスタンバイしていた。電車は珍しく混んでいたが、買う準備をしているような人はいない。なのに！峠駅に着いた途端座っていた人たちが売り子のおじさんめがけて殺到！あわてて私も並んだが、目の前で売り切れ。この夏最大の残念な出来事である。

（星佐都子）

◆自粛生活も長引き、家の中から草茫々の庭を眺めての暮らし。「暇だから草取りでも」と庭に出て溜め息、狭い庭に色々な木々が十数本も伸び放題。「お庭良いですね」と近所のご主人に声を掛けられ「雑草が大変で」と言い訳の私に「植物は新鮮な空気を供給して凄いですよ」の話。単純な私は大感激「コロナには新鮮な酸素が一番」と一安心。秋の虫達が綺麗な空気の中で盛んに唄ってます。

（佐藤美知子）

◆暑かった夏。東北の夏は青森のねぶたに始まり各地のお祭りが終わると夏も終わりという感じ。でも今年は祭りがあったのかなかったのかニュースをよくきいてないとわからなかった。毎年、泉区民まつりが八月末にあり、花火を近所の人達と連れだって見物していた。それもなし。夏！燃えるような太陽の下でマスクなしで人ごみにもまれながら夏祭りを楽しむことがめぐってきますよう祈ってます。

（K・T）

◆コロナ禍で開催が危ぶまれた東京オリンピック。実際競技が始まると、毎日テレビの前に釘づけになり、感動に酔いしれた。前回東京オリンピックのときは中3。先生が「君たちが生きているうちに、もう一度東京でオリンピックが開かれるかもしれない」と言ったのを覚えている。その通りになった。三度めはないと思ったわけでもないが、こんなにオリンピック観戦に熱が入ったのは初めてだ。

（其田敏美）

◆白い雲が青い空を流れてゆくように、日々の時を見つめながら人々の多様なすがたを大切にして、たくさんの絵を描きながらすごしていました。朝や昼、夕方の空を見るたびに一日一日の出来事が変りました。テレビやラジオに人々が動きましたね。じっと考える人、喜ぶ人、悲しむ人、叫ぶ人、うつむく人、こうして人は生きてゆくのだと考え、見つめました。そこに詩があり、流れが続きました。

（ぷりずむ詩房）

◆私は1966年1月に個人編集誌「路上」を創刊しました。以来、年2～3回の割で続けてきましたが、この7月、150号をもって終刊しました。その残務整理に一夏かけ、やっと終わったところです。時々「仲間もいなくて孤独じゃないの？」と聞かれます。それに対しては「なぜ孤独がいけないの？」と逆質問してきました。孤独もまた捨てたものではないというのが私の実感です。

（佐藤通雅）

◆十年もそのままの息子の書棚から湯本香樹実著『夏の庭』を読む。死ぬ人を見たいとの好奇心で一人暮らし老人の観察を始めた小学6年男子3人組。その出会いから孤独だったおじいさんの最後の生活は楽しいものに変わり、その夏を経て成長する子供達。この本を息子はどう読んだのか。コロナ禍で今夏も帰省はなかったが、メールで元気との事、何よりである。秋にまた書棚の本を読みたいと思う。

（T・H）

◆今年も子供らが帰省しないお盆を過ごす覚悟でいたが、嫁いで石巻市にいた末娘が12月に里帰り出産を予定し、希望する病院に照会した。受入れは市民に限ると言われ、娘は新型コロナウイルスに留意しつつ7月に住所も移し転入した。今は世話を焼きあいながら、在宅の生活。息子や長女とは、LINEでの会話やお互いの好物のやり取りで健康と無事を確認しあって猛暑を乗り切れた夏であった。

（山下一）

◆やはりオリンピック、パラリンピックTV観て仕舞った。それも、開会式、閉会式も両方4回。然しどこを向いても、こもり、こもりの嘆き節。一服の清涼剤だった。自分自身のフレイル、障害をものともしない、パラリンピックアスリートのさわやかな笑顔には救われた。お陰で、自身は、晴プー（プール）、雨読で乗り切った。プール往復の自転車はきつかったが、今爽やかな秋を迎えた。

（横山隆一）

◆自粛の日々手紙の整理に取りかかった。友人Y子さんからの手紙が特に多くいつも励まされた。ある時依頼された役職を「私にその器はないから」と断ろうとしたら「器ってね、最初は空なの。使う人が少しずつためていくのよ。あなたの器を一杯にして行って！」との便りが届いた。その役を受けた私は、多くの喜びや感動で少しずつ器の中を増やせたがまだ一杯にはならない。片付けも進まない。

（T・I）

◆海風の吹く石巻球場で県大会決勝戦を見た。息子の母校と夫の元勤務先が対戦、投手が光る東北学院が優勝し甲子園初出場を決めた。番狂わせの県大会のあとはテレビの前へ。創部50年の初出場の前に立ちふさがったのはイチローが出た愛知県の強豪校。ハラハラ見守っていると何と勝ってしまった！無観客の甲子園に流れた東北学院の校歌を40年間勤めあげた夫と共に聴き、忘れがたい夏となった。

（J・W）

◆私は昭和19年8月に旧満州国の奉天で生まれました。翌年の8月6日広島にそして9日長崎に人類史上初の原子爆弾が投下されました。何故アメリカは長崎のマリア様の頭上に原子爆弾を投下したのか。未だに答えのない歴史が続いていますね。両親は既に物故していますが私にとっての8月は生涯に渡り鎮魂の月となります。そして今ある命を両親に感謝する8月でもあります。

（阪本昭憲）

◆四季の日本では夏を過ごす知恵は打ち水、夕涼み等の五感から感じていたが、今年の夏はコロナ感染の事実を受け止め世の中は激変した。「徒然草」を読むと「世は、定めなきこそいみじけれ」無常観を感じた。結局人間は自然と共に生き、空間を（感染も）共有しているのだと痛感した夏だった。今は虫の音と秋晴れの日にオノマトペ感覚で耳に心地よい「リンリンとリンと鳴いたる鈴虫の軒端に吊す赤い風リン」。

（宗田淳）

第49回読書会

穏やかに、優しく生きる

小川糸『ツバキ文具店』 冬・春編

前半（夏・秋編）は代書屋を引き継いだツバキ文具店主の鳩子が、依頼を受けた手紙の代筆に誠心誠意奮闘する様子が描かれたが、後半では鳩子や彼女の周囲の人々に焦点が当てられている。慌ただしい現代の生活から切り離されたような、穏やかな生活や思いやりのある人間関係が、鎌倉という土地を舞台に繰り広げられる。

祖母と友人との間に交わされ手紙を手に入れたことで、鳩子は厳しかった祖母の心情と苦悩を知ることになる。祖母が生きている間に修復できなかった確執が今、静かにほどけて行く。春はみんなが幸せになる季節。

言葉の多様さや絶妙な比喩表現など、著者の言葉感覚の良さへの感想が多い。またこれからは代書屋ならぬデジタル代行屋出現か（?）などの楽しい話も出た。

10月13日8名出席。（佐）

次回読書会は12月8日㈬14時

江戸川乱歩「人間椅子」（新潮文庫『江戸川乱歩傑作選』所収）

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今回、第20回の節目の年を迎えます。今年のテーマ部門は①「20回を迎えた年賀状展へのメッセージ」、②「わたしの好きな動物」です。自由部門では、好きな作家や作品名、作品の一節、自作の詩や俳句などを添えた年賀状作品を募集し、館内でご紹介します。

多くの会員のみなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますよう、お願いいたします。